
彼女の夏空

雨垂穿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女の夏空

【Nコード】

N4151Y

【作者名】

雨垂穿

【あらすじ】

ワケあり主人公とワケありヒロインの一夏の回想録、開幕。

〜1〜 (前書き)

携帯も駆使して書く、初めての作品です。

数年間温めたプロットなので、楽しんで読んでもらえたら幸いです。

夏休み一日目。

高校三年ともなればそれなりに忙しい、夏。

ところがその忙しいはずの高校三年の俺は今、汗をだらだら垂れ流しながら学校への長い坂を上っている。さっきまではクーラーがかかったコンビニで涼んでいたのに。突然の呼び出しで元サッカー部の俺は部室へ向かう。

「圭佑が持つてきてくれればいいのによー」

思わず独り言が漏れる。呼び出し主の元部活仲間俺と家が近い。俺の私物くらい、持つてきてくれてもいいはずだ。

それとも。

「やっぱ気にしてるのかな…」

俺が部活を止めるのに、最後まで反対したのは圭佑だった。本人が責任を感じる謂われは全くといって無いのに。

「真面目だからなあ」

苦笑と共に独り言が陽炎に消える。ココロにちよつとだけ残る後悔も消えてくれればいいのに。

坂を、上る上る。

また上る。

やっこのことで正門が見えた。アーチ状の大きな建造物で何代か前の卒業生の作品だというアートが施された過剰装飾の正門。

両脇の林からはやかましいセミの鳴き声が響く。その中にチラホラと、部活中の連中の掛け声が混ざる。三年間自分が吐き続けたサッカー部の声も交じる。耳を塞ぎたくなつたのは、蝉がうるさいからだ。

「ん？」

人気のない正門の前に、誰かが立ってる。このクソ暑いのに何を
するでもなく、ただ立っている。

薄水色のワンピースをきた綺麗な女だった。年は俺らと同じくら
いだろう。長い髪と、透き通るような白い肌だった。黒い瞳がなん
となく俺を追ってるような気がして会釈ついでに顔を伏せた。その
まま通りすぎる。

全く奇妙な奴もいるもんだ。この日光の中、傘も差さずに立つて
たら綺麗な白い肌が黒焦げだろうに。

そんなことを思いながら部室棟に向かおうと頭をめぐらした時。

ふらり。

ゆらり。

そんな擬音を伴って女が倒れそうになっているのを視界の端で捉
えた。

喉がひゅつと鳴って、サッカーで鍛えた反射神経を全力で駆使し
て手を伸ばす。

転ぶだけとはいえ、地面はコンクリート。打ちどころが悪けりや
入院クラスだ。

手を伸ばしきっても届かない。根性見せる。足が地面を蹴る。体
が虚空に浮かぶ。奇妙な浮遊感と、手に柔らかい何かが触れる感觸
掴んだ。体を滑り込ませる。

「あああああああああ！！ガッ！ごおおお！！」

喉からすごい声がほとばしった。女の体を抱えたままたたかに
背中を打ち付けたのだ。

頭だけは守ったものの、灼熱のコンクリートの上にダイブは背中
に擦過傷を幾つも作ったことだろう。

薄いシャツを着ていたことがあだになった。痛い、痛い。

「だ、大丈夫か？」

俺が大丈夫じゃねえよ、という涙混じりのココロの声を無視して
俺の上に乗っかっている女に聞く。

仰向けで俺に乗っかってる女の長い髪から良い香りがする。柑橘系の、甘酸っぱい、夏の匂い。

ふと、俺は俺の栄光の左手が何か柔らかいものをがっしり掴んでいることに気づく。先ほど女を救うのに一役買ったこの左手。ふにふにした何かを、がっしりと。首をもたげると。

女の胸をホールドしていた。

この暑いのに冷や汗がでる。とんでもない状況に脳が思考を放棄。それを良い事に左手は胸をもみもみ。女があつとか言う艶声をやばいやばいやばいやばい。

手を離そうぜ、オーケーベイビー。手を離せ。それで万事解決じゃないか。それで俺は女を救ったヒーローだっていうんだからもう離れるよこの栄光の左手めちよいお前調子のりすぎだろお前にもみもみしてるんだええもみもみ？

とりあえず手を離れた。

女を上からどかした。

女の頬がちよつと上気して赤くなってる。暑いからなあ、うん。という訳で。

「アディオス!!!」

シユタツつと敬礼して回れ右。

俺偉いなあ。助けた女性にお礼も言わずに去る。カッコー！。走りだそうとした俺の方に万力並の圧力がかった。ぎよつとして振り返ると。

「ゆー君？ちよつとお話いいかなー？」

笑いながら怒髪天をつく、幼なじみがいた。

〵〵 (前書き)

連載二回目。

真夏。炎天下。コンクリート。

この三条件が揃った時はぜひとも注意して欲しい。これらを駆使して行われる拷問は、「鉄の処女」やら「三角木馬」やらと同レベルに匹敵する。なんでそんなことが分かるかって？簡単だよ。

「ぎゃあああああああああ！！！！」

実験してるから。

現在進行形で。

ものすごい熱と上から容赦無く浴びせられる、温かい言葉尻からは想像もできないような刃を内に秘めた言葉たち。幾千幾万の弾丸となってマシンガンのごとく俺のココロを削り取っていく。

拷問の執行官、この真夏に真つ黒なローブを着た死神にしか見えない補正をかけられた少女の名前は。

「……………、ゆい……………、許して……………」

かすれた声が喉から漏れる。

俺の幼なじみこと西川ゆいはその怒りの矛先を一旦鞘に収め、コンクリの地面に正座した俺と視線を合わせるためにしゃがむ。普段はおっとりしていて笑っている瞳は今、燃え盛る炎で埋め尽くされている。

「ねー、ゆーくん、私の見間違えだと祈りたいんだけどー」

笑顔でニコニコ笑いながら、ゆいは俺のシャツの襟を握りしめ。

「どこかのお嬢様と破廉恥なことしてなかったー？」

俺は今までに死にかけたことが三度ある。ゴミの収集車に飲み込まれそうになったこと、二トントラックにはじき飛ばされそうになったこと、ヘリの着陸に巻き込まれそうになったこと。

今の俺は、間違いなくその四度目を経験しているだろう。

とにかく、目が怖い。笑っているのに怒っているのは言葉と同様、普段のぼやぼやした瞳を見慣れているだけあって、こんな目に見つ

められたらどんな悪事でも吐きそうになる。

だが駄目だ。今こいつに真実を話してみる。それこそ倫理規制が
かかりそうな事態が発生するに違いない。俺はシューティングゲー
ムは好きだが血を見るのは大嫌いだ。それが自分の血だったら失禁
して死ぬ。

だってなあ。

まさか、とつさに救った女の胸をもみもみして、なおかつその感
触が気に入ってしまいました、なんて言ってみろ。同年代の中でも
かなり主張が激しい双丘をお持ちのこの幼なじみは烈火のごとく怒
るに違いない。

しかして、この幼なじみ。

天然である。

自分が今短いスカートを履いていることをすっかり忘れてしゃが
むもんだから。ほら。

「今日は縞々か」

「？」

毎日何かしらの形で見えてしまう彼女の秘密は、一学期一杯で終
わりかと思えば。

夏休み初日もちゃっかり見せてくれちゃって。

「可愛いじゃねえかこんちくしょう」

「何かゆるくんから冷たいものを感じるんだよ……」

腕を抱えてブルリとふるえるゆい。目の前の双丘も連動。

というか、さっきからその場で拷問を受けてたから忘れてたけど、
俺が救った女はどうなった？

振り向くと。

夏の日差しの中。

ぼんやりと立った、青いワンピース。

どこから出したか、麦わら帽子。

結ばれたりボンが風にわずかにそよいで。

あたかも夏の使者のように。
くるりくるりと踊りながら。
少女は存在していた。

「は？」

いい年した女だぜ？

それが、外聞も何もあつたもんかと言いたげに、くるくる回っているのだ。

にこにこ、でも、ヘラヘラ、でもなく笑いながら。

楽しそうに、楽しそうに。

「見たことない子だねー？ ゆーくんのお知り合いかな？」

知らない、と思う。ただ、彼女を見ていると、なんとなく見覚えがある気がするのだ。

どこかで、似たようなモノを見たような。

大きな木。

なぜか、彼女の隣にはそれがあるような。それがなきやいけないような気がした。

「たぶん、知らない。てか、俺が知ってたらお前も知ってるだろう、普通」

ゆいは俺の家、つまるところのオンボロアパートに隣に住んでいる。

隣といってもゆいは大金持ちの一軒家。俺とは格が違う。

「ふーん。不思議な子だねえ」

いつもの調子に戻ったゆいがポワポワを振りまきながら俺の隣に腰を下ろす。

地面にはちゃっかりバツクを敷いてある。俺は正座を崩して何とか拷問を終了させる。

つつ、と女が舞う。

全身全霊で喜ぶように。

長い髪は柑橘系の匂いを振りまきながら広がって。

さながら扇のように。
広がっては、閉じて。
また広がって。

優雅に、優雅に舞い続ける。

どれくらいそうしていただけるか。

ふと、女が舞をやめた。

ピタリ、と。

となりではゆいが無邪気にスタンディングオペレーション。

女の黒眼が俺を捉える。

改めて、綺麗な女だと思う。

すっと通った鼻筋に、きりりとした眉。細面。長い髪。パーツはクール系なのに、どこかふんわりした印象を受ける顔だった。

白い肌の中、そこだけ薄く朱をぬったような唇が綺麗な声を紡ぎだす。

透き通った、鈴のような声。

「お願いがあるの」

「ああ」

無意識に頷いていた。頷いてから気付いた。何してんだ俺。

「ありがとう」

そう言っただけで笑う、女。それだけでまあいいかと思う。口元が緩む。

隣では立ちっぱなしのゆいがいじけた顔で俺を睨んでいた。

「あのね」

すすすすと、女が俺に寄り添って来る。

肩に手が置かれて。

耳元に吐息がかかる。

心臓が、バクン、と破裂しそうになる。

女は恥ずかしそうに、ちょっと笑うと、小さな、本当に小さな声で言った。

「言い放った。
私を生んで。そして死なせて」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4151y/>

彼女の夏空

2011年11月14日03時31分発行